

## 研究ノート

研究者名：大石 純里子

# 「岩手県一関市花泉町金沢における盂蘭盆会の風習」

東海大学大学院文学研究科

文明研究専攻博士課程後期

大石純里子

### はじめに

いわゆる「お盆」と呼称される年中行事は、毎年8月15日（陰暦では7月15日）を中心に行われる祖靈を祀る一連の行事のことを指す。俗に「盆暮れ正月が同時に…」という言葉があるように、盆は暮れや正月同様に日本を代表する年中行事の一つであり、その期間は普段遠く離ればなれになっている家族や親戚が一所に集い、祖靈を祀りながら共に時間を過ごす大切な期間である。

そんな盆行事は、一般に仏教行事と認識されていることが多いが、その行事内容には仏教の教義では説明しきれない部分も多く、また、宛ら「ご当地物」といわんばかりに全国各所に様々な様式が存在するのもその特徴といえる。

しかしながら、このような特色に富んだ伝統行事は、近年各地で簡略化あるいは省略化の一途を辿っており、また、詳細を知るお年寄りの高齢化なども相まってその本来の意義が失われつつある現状にある。

そこで本稿では、全国津々浦々の盆行事の中のほんの一例として、岩手県一関市花泉町金沢で行われている盆行事を紹介したい。金沢地区は藩政時代、伊達藩の行政区画において磐井郡流地区に属していた地域であり、その歴史は古く、往時よりの食文化の一部を今に伝える土地としても知られている。したがって、当地の盆行事もまた長い歴史を持つものであり、それは十二分に調査に値する伝統文化であると思われる。なお、実際の調査は2010年8月12日～19日の一週間に渡り行い、その際、比較対象として同じく旧流地区に属していた周辺地域などでも少々の聞き取りを行った。これにより、当地の伝統文化をほんの僅かにでも保存・記録出来れば幸いである。

### 1. 孟蘭盆会の概略

#### (1) 盆の由来とその起源

盆という呼称は「孟蘭盆」に由来するとされ、これはサンスクリット語の「ullambana(倒懸)」を音訳したもので、インドで夏安居の終わった日に死者が受ける逆さ吊りの苦悩を払うために供養を始めたのがその起源とされている。

日本でこの祖靈を祀る行事が行われ始めたのは推古天皇14年（606年）の記録がもっとも古く、後に古神道の先祖供養や祖靈来訪の民俗信仰と習合して全国各地へと広まっていった。更に江戸時代に至ると、幕府が庶民に強いた檀家制度により仏教式に行うことが強制され、

それにより、以前より行われていた古神道における先祖供養の儀式や神事が仏教行事としての盂蘭盆と習合して現在の形が出来上がったとされる。また先述の通り「盆」という呼称はこの盂蘭盆の略語とされるのが通例だが、一説には供養のために捧げる供物を乗せるための器の名に由来するともいわれている。

## (2) 盆行事

盆行事の主な流れは、一般に8月13日（入盆）の夕方に軒先や盆棚に盆提灯を提げ、門前や玄関などで麻幹（おがら）を焚き精霊を迎える儀式「迎え火」を行うことに始まり、14日から15日にかけて「墓参り」や関連する諸々の儀式、また、盆に訪れた精霊を迎える「盆踊り」などを行い、16日（15日のところもある）に入盆に同じく門前や玄関で「送り火」を焚いて全ての行事を終えるのが通例である。しかしながら、現在では8月13日から16日（地方によっては一ヶ月早い陰暦で行うところもある）までの4日間に設定されているこの盆の期間も、さかのぼれば江戸時代に設定されたものであり、それより古くは6月晦日から7月16日までの長期間に渡り行われていたようで、まさに盆は正月に匹敵する大切な行事であったようである。

関連する儀式や行事の詳細は各地にさまざまな事例が報告されているが、中でも各地で特色に富むのが所謂「送り火行事」である。もっとも有名なもの一つとして京都で行われる「大文字の送り火」などが挙げられるが、これは8月16日の夜に京都東山の如意ヶ岳の大文字山で行われる盆の送り火行事である。その他にも、送り火が変化したものとされる、盆の15日あるいは16日に依代であった供物などと共にたくさんの小さな灯籠を川や海に流す行事「灯籠流し」や「精霊流し」などもある。これらは特に北九州で盛大に行うところが多く、佐賀の花舟や久留米・長崎の精霊舟などが有名である。また、一連の盆行事と送り火が合わさったユニークな事例として、四国・九州地方で行われる「盆小屋」が挙げられる。この行事は12～13歳の子供たちが盆に家の付近に竹や藁で仮小屋を建て、中に精霊棚（盆棚）を祀り、そこに餅などを供え、小屋の中で籠もったり遊んだり寝たりするもので、最後に火を掛けて焼き払うところは正月の左義長（どんど、どんどん焼、さんくろう）に同じである。

## (3) 祖靈とは

祖靈とは、家族・部族・民族などの祖先の靈のことである。それらの靈を祀る祖靈崇拜という習俗は、農耕民族の間に広くみられる宗教形態で、人の死後も靈魂は生き続けるという観念から生まれたものとされる。

崇拜の対象となる祖先には、始祖・祖神・死者・死靈などの観念があり必ずしも一定ではないが、日本の場合は中国の祖先崇拜の形式と儒教の孝の観念が日本古來の氏神信仰と結合したものとみられている。それによると祖靈や死靈は常世の國にあると考えられ、祭祀の際にはその常世から靈が帰り、子孫との共食の宴が行われることで互恵的な結び付きを示すのが通例である。

## 2. 岩手県一関市花泉町金沢の盆行事

### (1) 岩手県一関市花泉町金沢の概要

岩手県南部、北上川流域の豊かな稻作地帯に位置する金沢は、2005年9月の平成合併を経て、現在では一関市に含まれている。

前述の通り、古く藩政時代当初には伊達藩（仙台藩）の行政区画における磐井郡流地区に属していた当地は、慶長14年（1609年）に町割りが行われ本町と仲町が区画されると、所在が石巻街道と東山街道の交差地であったことから宿場町としても栄えた。その後、天和2年（1682年）に田村藩（一関藩）の領地となると、本藩（仙台藩）とは別に一関藩としての代官・大肝入が置かれるようになり、流地区の新たな流大肝入が金沢村に置かれるようになった。翌天和3年には新たに新町が区画されそれにより現代にまで残る町割りが完成するも、度重なる大火に見舞われたことから宿場町としての往時の面影は現在僅かに残るのみである（資料1参照）。

文化面においては、周辺に県指定文化財となっている明応4年（1393年）開山の古刹、曹洞宗福荷山宝持院が、また、宝暦5年（1755年）に近隣の内沢地区にある三居山から社地替えをした金沢八幡神社（地図1参照）などがある。この金沢八幡神社は、清水、飯倉の八幡神社に同じく元は康平の頃（1062年頃）に起こった前九年の役の際、源頼義が山城国石清水八幡宮を歓請したものと伝えられ、寛保元年（1741年）に火災に遭い焼失するもその後金沢宿にて宿屋を営んでいた大林庄右衛門による土地の寄進を受け、宝暦5年の社地替えを経ての二年後、新殿が完成したのを契機に内沢の氏子一同が行列を組み御神体を運んで遷宮がなされた。そのため現在でも毎年九月（陰暦では8月14日）には、遷宮がなされたことを祝い内沢の氏子たちが往時と同じく黒装束をまとった「やっこ」に扮し、掛け声に合わせ片足を上げ両手を広げる独特の振り付けでもって神社参道に面する旧街道を練り歩く「大行列」（資料2参照）と呼ばれる行事が行われている。宝持院と並びこの行列もまた町指定無形文化財である。

### (2) 調査結果

本調査では、金沢地区（この場合の地区は旧部落=村を単位とするもの）（地図2参照）を中心聞き取り・実地調査を行い、また比較調査として近隣にある老松地区の事例に関する文献調査や飯倉地区での聞き取りも行った。以下にその調査結果を紹介する。

#### ①金沢新町所在・永澤家の事例

本調査では、特に永澤家における盆行事についての聞き取り・実地調査を行った。また、期間中は当家への滞在許可を頂き、筆者自身も実際の行事へ参加する機会を頂いた。

永澤家は金沢新町に位置し屋号を新宅という。屋は旧街道沿いにあり古くは農業を営む傍ら少々の商いもしていたとのことで、1998年に屋を改築したがそれ以前は当地に一般的に見られる商家造りに似た屋敷配置（資料3参照）をしていたようである。現在の当主は永澤洋氏（52）であり、聞き取りは主に氏にお答え頂いた。また、洋氏妻・友子氏には姑・幾子氏

の書き記した盆行事に関するメモを拝見させて頂いた。以下、順次当家の盆行事を紹介する。

[8月12日]（以下、資料4参照）

当地方では、盆の準備を入盆となる8月13日の午前より始めることが通例とされるが、折しも今年は東北地方へ台風4号が接近していたため、永澤家では前日の12日午後（夕刻間近）より一部準備を始めた。この日に行った作業は、屋敷裏手にある外蔵より前年度の盆後に仕舞った盆棚（精霊棚）のパート（資料4-a参照）を母屋に搬入する作業と盆棚飾りに必要な笹竹の調達（資料4-b-i, ii参照）の二つである。

笹竹の調達は屋敷裏手に広がる田の脇にて行う。永澤家は東西に走る旧街道の南側の並びに位置しており、それら街道沿いに立ち並ぶ南側の屋の直ぐ裏手は高低差約4～5メートル下より付近を流れる金流川に至るまで稲作地が広がっている。竹林自体は金沢新町・畠中家所有の土地であるが、調達に際し特に断りを入れることはないという。また、近隣にはこのような竹林が幾つか点在しており、屋敷内にて竹を調達出来ない場合はいずれもそのような調達手段を取ることである。用意する竹は二本で、これは盆棚の全面あるいは後面脇に立てるために必要な本数であり、棚の四隅全てに配置する場合には四本が必要となる。

永澤家では棚後面に二本を配置するのが通例とのことで、選定の条件は出来るだけ枝振りの良いものを選び、その場で屋の天井の高さを考慮した丈に剪定する。その際、飾った場合の見栄えも考慮し両者のバランスを加味した上で、先端部に二～三枝を残すかたちで余分な枝を落としておく。その場での作業は概ねそのような流れとなる。

[8月13日]

午前中より家人揃って盆棚の組み立て・設置を始める。永澤家では盆棚を仏壇の前に飾る。その際、位牌などを取り出した後で仏壇の扉は閉じられるが、これはスペース的な理由であって扉の開閉に特に決まりがあるわけではない。その間、友子氏は盆棚に供えるための諸々の品（資料4-c参照）の買い出しに出掛けた。

供物として用意されるのは、カボチャや青りんご、キュウリ、茄子、その他故人の好物や季節の果物、菓子等である。その他、供物以外で用意する物は、盆棚の上に敷くゴザ（約一畳ほどの大きさのもの）、位牌などの下に敷くガツゴ（資料4-d参照）と呼ばれる小さいゴザ（約20×30cm）、精進料理を乗せるためのハスの葉と箸として添える柳の枝（資料4-e参照）、笹竹、笹竹に飾る短冊飾り（表裏ともに色の付いたもの）（資料4-f参照）、墓参りの際に松明として使用するラッソク（方言：ラツツォク）（資料4-g参照）等である。

「ガツゴ」とは当地方の方言で「ガマ（蒲／香蒲）」のことを指す。ガマはガマ科の多年草で池や沼の岸辺に群生し、高さ1～2mにまで育つ植物である。根茎は白く泥中を這い、葉は線形で厚く茎よりも高く伸びる。ガツゴのゴザはこのガマの葉を編んで作るものであるが、現在では盆用品として商店やホームセンターで売られているものを使用している。また、柳の枝は「柳箸」という商品名にて盆用品売り場などで売られており、それを5cm～10cmほどの長さに切り分け箸として添える他、茄子やキュウリで作る牛や馬の足の部分にも使用される。一般には苧殻を箸として用いるようであるが、当地ではこの柳箸を用いるのが慣例である。なお、松明として用いられる「ラッソク」は、麻がらの先端に松脂を付けたもので、こ

れもガツゴに同じく一束88円（2010年現在）ほどの安価で売られている。

その他にも盆棚飾りの一つとして、盆の時期に近くの宝持院より檀家へと配られる供養幡なども飾られる（資料4-h参照）。この供養幡は別名「五如来幡」ともいい、その五色の幡は仏の徳を称える五仏の如来名号に由来するものである。配置の順序としては、盆棚の後方両脇に立てた竹に渡した縄へ向かって右側から①南無多宝如来、②南無妙色身如来、③南無甘露王如来、④南無広博身如来、⑤南無離怖畏如来の順に取り付けていく。

盆棚自体の設置場所は、永澤家では仏壇の前に置く。その際、スペースを考慮し、位牌などを取り出した後で仏壇は閉じられる。その後、盆棚を組み立てるとき、後面両脇へ前日に用意した笹竹を立て、棚全体に真菰のゴザを敷き、最上段中央にガツゴのゴザを敷いてその上に位牌等を置く。次いで中段に丸い盆の上に乗せたハスの葉と茄子の牛やキュウリの馬、菓子等を置く。そして最下段に重さのある野菜・果物類を乗せ、精靈花（仏花）などを飾り棚全面の両脇に盆提灯を置き、最後に笹竹の間に張った縄に供養幡、葉に短冊飾りを取り付け、これで一応の完成となる（資料4-i参照）。

中段に配したハスの葉には行事に従い順次精進料理が供えられていく。また、期間中盆提灯の明かりは常時灯したままにしておく。これは屋に帰って来る祖靈（精靈）に家の位置を知らせるための目印にするという理由によるものである。以前は家紋入りの盆提灯も提げていたようであるが、スペース的な事情から永澤家では新盆などの特別な場合を除き、現在では提げていないことである。

以上の準備を経て、同日夕刻より入盆となる。永澤家でも門口にて迎え火を焚く。焚き付けに使うのは麦わらである。本来は門口付近の地面で焚くものであるが、前述の通り台風の影響による強風のため、安全性を考慮し今年は略式のものに留めた（資料4-j参照）。

その後、晩より盆行事が始められる。幾子氏のメモ書き（資料4-k参照）によれば、永澤家では精進料理として「ハット（ツメリ）」（資料4-1参照）や「ハヤキ」（資料4-m参照）、煮しめ（資料4-n参照）、精進揚げ（天ぷら）などが用意される。ハットは大根・人参・ゴボウ・茄子・干し椎茸・ミョウガなどの具に、小麦粉を練って作るハットを合わせ汁にした料理である。またハヤキは小麦粉・黒砂糖・味噌を練り合わせたものをミョウガ又はシソの葉に包み油で揚げたもので、いずれも伝統的な当地方の精進料理である。これらの精進料理は、家人が食す前にまず盆棚のハスの葉皿に供され（資料4-o参照）、揃って手を合わせた後で食事を始める。以前はこの日の晩より盆の期間が終わるまでの間、なるべく殺生を慎むような料理が出されていたとのことだが、現在ではあまり厳格な呈は取られてはいないという。また、例年入盆の日から親戚一同が介し宴を催すのが通例とされるが、それぞれの仕事などの都合上で翌日に宴が催されることとなつたため、この日は家人のみの入盆となつた。

[8月14日]

この日の朝食には、精進料理として変わりご飯（炊き込みご飯）（資料4-p参照）、とろみのある汁物などが用意される。変わりご飯とはニンジン、油揚げ、こんにゃく、椎茸などの具を入れ、醤油や酒などで味を調えてから炊き上げたものである。汁物の具は豆腐、油揚げ、こんにゃく、人参などで、そこに片栗粉でとろみを付けたものである。

永澤家では、この日の日中に家人揃っての墓参りを行う（資料4-q参照）。詣でる時間は必ず夕刻前までとし、これは「夕刻以降に墓に参ると死人に引っ張られる」という古い言い伝えによるものであるらしい。

墓に参ると、まずは家人が協力し墓の周囲を掃除し、墓前が整ったところで供物を捧げる。持参した品は精靈花（仏花）の他、前日と当日に用意した精進料理、菓子、果物等である。それらの供物をハスの葉の上に盛り墓前に供するが、その際、盆棚の場合とは異なりハスの葉を四角形に切り分け皿の型とする（資料4-r参照）。二つ用意される湯呑みには、一方に水をもう一方には茶を注ぎ入れる。また、茄子やキュウリをサイの目に刻みそれらと洗った米を混ぜて作る施餓鬼用の所謂「水の子」も供える場合もあるようだが、こちらの方は特に厳格なものではないらしい。そうして供物を供した後、墓前に揃って線香を上げ手を合わせると、次いで本家（屋号：要害<sup>ようがい</sup>）などの墓へと詣でる。そこでも同様の供物と線香を上げ手を合わせると、永澤家では最後に墓域奥にある無縁仏へと詣で墓参りを終える。

晩は前日保留になっていた親族の宴が催される。これは祖靈と共に食事をする大切な共食の宴である。そのため永澤家では前日の13日に出された精進料理と同じものを再び食卓に上げた。通例この日はうどん（または素麺）などが用意されるものであるが、上述のような理由により本年は割愛された。

#### [8月15日]

朝は特に精進料理などは出されないが、幾子氏のメモには白飯などを食すとある。永澤家ではこの日、洋氏が近所や本家などへ線香を上げに行き、同様に屋を訪れた来客の対応などをする。また、昨年度までは14日～15日にかけて宝持院より和尚が檀家を回り棚教を上げるのが通例であったが、本年度より新和尚の方針で檀家回りは取り止めの運びとなったという。

晩は通例通り麺物が出される。また、夕刻より金沢新町盆踊りが行われた。これは祖靈を慰めることを目的とした地域の伝統行事である。

#### [8月16日]

幾子氏のメモによれば、この日の朝食にはアンコや胡麻などで味を付けた餅とあるが、最近では特に意識してそのような用意はしないという。

午後より送盆となるため、永澤家でも盆棚の片付けなどに取り掛かる。来年度も準備がしやすいよう丁寧に盆用品を仕舞い、棚に供した茄子やキュウリ、その他の供物はガツゴのゴザにくくるておく。以前はこれを精靈流しとして近くの金流川に流していたそうだが、近年の環境保護の観点から最近では金流川の水に一度浸し「振り」をした後、竹飾りなどと共に一般ゴミとして破棄するとのことである。その他、夕刻には迎え火に同じく門口で送り火を焚く。

以上が金沢新町・永澤家における一連の盆行事の流れとなる。

#### ②金沢公民館での聞き取り

金沢公民館は曹洞宗稻荷山宝時院と金沢八幡神社の中間地点に位置し、「かよう学校」などのカルチャー教室を主催して地域の文化交流・保存活動を積極的に行っている活動盛んな

公民館である。以前は新町のみの公民館であったが、現在では仲町、本町を含む金沢地区全体の公民館となっている。

聞き取りは主に公民館館長の小岩達氏（69）にお答え頂いた。調査手順・手法は永澤家における調査結果を元に質疑を行い、金沢地区の他、近隣地区の盆行事に関しても合わせて様々なご教示を頂いた。以下、順次その結果を紹介する。

#### [盆棚]

現在、金沢地区で一般的に用いられる三段式の盆棚は比較的新しい様式のものであるらしく、旧流地区的伝統的な盆棚は高さ1mほど（小岩館長談、実際のスケールは不明）の脚が付いた正方形の卓であったという。

古式の棚の設置法は、卓の四隅に笹竹を立て周囲を取り囲むように竹に縄を巡らせ結界とし、枝や縄に色紙飾りを取り付けるという。また卓上へは新式とは異なり真菰のゴザではなく卓の大きさに合わせたガツゴのゴザを敷く。したがって永澤家の事例に見られるような最上段に小さめのガツゴのゴザを敷くのは、その名残であろうとのことだった。

新式（三段式）への正確な移行時期は不明だが、移行理由の一つとして上げられるのはスペース的な問題である。古式の棚は新式のものよりも大きいものであったようで、その設置に際しては、当地区で通例の設置場所となっている仏間のかなりの範囲を占領してしまうらしく、そのためよりコンパクトな現在の棚へと移行していったのではないかとのことだった。残念ながら現在の金沢地区では古式の盆棚を飾っている屋は既にないとのことであったが、同じく旧流地区に属していた老松（地図2参照）やその他一部の地区で古式の棚を飾っている屋はあるかも知れないとのことだった。

#### [供物・飾り・精進料理]

全国的に盆の時期に盆棚に供される馬や牛を模ったキュウリや茄子の飾りは、一般に彼岸と此岸を行き来するための祖靈の乗り物として用意されるものである。これは足の速い馬に乗り一刻も早く祖靈が屋に帰れるように、また歩みの遅い牛に乗ることで少しでも長く此岸に留まれるようにとの願いを込めて供される供物である。しかしながら、金沢地区を始め周辺一帯の地区では、これらを「一方通行の乗り物」つまりは祖靈が彼岸へ帰る際にのみ乗る乗り物であるという認識が持たれているようで、具体的な理由は定かではないがこれも当地区の伝統的な文化認識のようである。

また、今では一般的となった供養幡も当地で古来より飾られていたものではないようで、十数年前より宝持院で配布され始めたものであることだった。これは永澤家で1993年に撮影された盆棚の写真（資料5参照）からも見て取れるもので、それ以前はそこに色紙飾りを下げるのが一般的だったようである。現在では供養幡のみを飾り色紙飾りを用意しない屋も増えたようで、その認識の度合いも人により様々である。

精進料理に関しては、ハットやハヤキ、土産餅などの伝統料理も盆の時期に限定されるものではないようで、冠婚葬祭やその他の祝い事の席にも用意されるものであるらしい。中でも土産餅や期間中に食される餅料理などは、藩政時代より一つの食文化形態として一関地方に伝わる餅食文化に由来するものとのことである。

### [周辺地区の盆行事—老松の事例—]

金沢地区の東に位置する老松地区（地図2参照）は、旧峠村と旧男沢村が明治8年10月に合併し老松村となった地区である。以下に、公民館での聞き取りを元に文献資料の情報を加味した当地区の盆行事について紹介する。

老松地区では、迎え盆（入盆）となる8月13日（陰暦：7月13日）に各屋で盆棚（金沢地区に同じく新式のもの）を供える。その際、盆棚の四方に笹竹を立てそこにメ縄を回し、五色の四垂れを下げる。その上にガツゴのゴザを敷き位牌を移し、その他スイカや瓜、トウモロコシ、菓子、おふかし、お煮付け、キュウリの馬や茄子の牛も合わせて供え、ローソクや線香などを灯して拝む。夕刻になると祖靈を迎えるために門口で迎え火を焚く。焚き付けに使われるのは、やはり麦わらである。

また、当地区では初盆（新盆）のある家では庭先に杉灯（通称：杉灯籠、実際のスケールは不明だが、聞き取りによると長いものでは10mほどになるという）（資料6参照）と呼ばれる灯籠を立てる。これは初めて家に帰る祖靈に対し、高い位置に灯籠を据えることで自分の家へ迷わず帰って来られるようにと考えられたものである。

翌14日（同：7月14日）には、「おしょうご（お焼香）」と称し墓参りを行う。その際、墓前にハスの葉を敷き、その上におふかし、果物、菓子、お茶、水、線香、水の子、ローソクなどを供えて拝む。供物としては上記のものが一般的なようだが、厳密な規則はなく、屋によって特徴があるという。また、自家の墓参りが済んだ後は親類や知人・友人の墓へも参り焼香をするという。

8月15日（同：7月15日）は、祖靈が14日・15日の両日屋内に留まるとされることから、盂蘭盆会と称した精靈祭或いは御靈祭などの供養を行う。また、この日は「お盆礼」といって普段の無沙汰を詫び、懇親会などの酒宴を催す。

送り盆となる最終日の16日には、迎え盆同様に門口で送り火を焚き、御靈を慰めるための盆踊りなどの行事を地区で催す。その他にはキュウリの馬や茄子の牛に、土産餅などを荷鞍に括り付け川に納める精靈流しなども行う。

なお、家例によっては「二十日盆」「三十日盆」などと称し、8月20日或いは30日まで盆棚を飾り続ける例もあるという。その際、20日と30日にはお盆礼が行われるのだという。

### ③飯倉所在・菅原家の事例

小岩館長の計らいで、近隣の飯倉地区（地図2参照）にて今もなお古式の盆棚を飾っているという菅原家への聞き取り・実地調査の機会を頂いた。なお、実際の調査へは公民館職員・阿部氏にご同行頂き、また調査へのご協力も合わせて頂いた。

調査手順・手法は、公民館同様に永澤家の事例や老松地区の事例を基に質疑を行い、相違点などがみられた場合には特に重点的に聞き取りを行った。以下に調査結果を紹介する。

飯倉は明治22年に旧金沢村と合併し金沢村となった。菅原家は当地区の代表的旧家の一つである。菅原家の屋敷は当地方に一般的に見られる農家造りの屋敷配置（資料3参照）を持ち、屋号をタケノシタ（嶽下）という。これは菅原家が祀る当地区の氏神「オミタケサマ

(御嶽様)」に由来するものであるという。

聞き取りは主に、菅原家当主妻・アチ子氏(68)にお答え頂いた。アチ子氏は昭和17年の湯島(地図2参照)一湯島地区は明治8年に旧上油田村と旧下油田村が合併し油田村となり、次いで明治22年に旧鶴島村と合併し油島村となった地区一の生まれで、昭和39年に当飯倉地区の菅原家へ嫁がれた方である。

調査実施日は盆明けの8月18日のことであったが、折しも菅原家では御子息の七回忌の年であったことから、三十日盆として8月30日まで盆棚を飾っているとのことであった。

菅原家の古式の盆棚(資料7-a, b参照)は、高さ約80cmほどの卓であり、卓全体に錦の袈裟を掛け、その上に更に真菰のゴザを敷いている。棚奥が段になって見えるのは卓の上に細長い台を設置しているからであり、これは位牌の数が多いため配置した際にそれらが見えやすいようにと配慮されたものであるという。なお、盆行事期間中に付き、棚自体の観察は控えることとした。

設置場所に関しては、金沢地区の事例と同じく、菅原家でも仏壇の前に配置するのが慣例のことだが、その際、永澤家の例とは異なり、盆棚飾りの笹竹は棚前面両脇に二本立てられるのが通例であるという。しかしながら、アチ子氏の話によれば、氏の出身地である油島では盆棚は大抵仏壇とは離れた場所に設置され、そのため四方に遮るものがないので笹竹は卓の四隅にそれぞれ立てるのが一般的だという。その他にも、老松の事例では新盆の際に立てるという杉灯籠も、油島では新盆のあるなしに関係なく毎年盆の時期に屋敷の庭に立てるものであるとのことだった。

盆棚飾りについては、菅原家でも寺院より配布される供養幡を取り付けている。供養幡を取り付けるようになったのはやはり最近になってのこと、アチ子氏の話によれば、これは祖靈の他に様々な靈と共に供養する「合同供養」になってからとのことであった。なお、本来は金沢地区の事例同様に笹竹に渡したメ縄に色紙飾りを取り付けるよう、菅原家でも以前はそのような様式が取られていたとのことだが、飾り作成の手間や供養幡自体の色味の派手さなどの理由から、現在では供養幡のみを飾っているとのことだった。

また、盆提灯に関する慣例としては、菅原家では通例、棚に向かって左側に菅原家の家紋(梅鉢)入りの大提灯(資料8参照)を一張り下げるという。その他の一般的な盆提灯(永澤家の例参照)は通例用いず、資料7で見られるような提灯を立てるのは家人の七回忌が済むまでのこととされているようである。

その他、棚に供する供物については、菅原家では現在朱塗りのお膳を主に用い、そこにプラスティック製のハス皿(資料9参照)を合わせて使っているのだという。また、その際、お膳に添える箸に柳箸を用いるのは金沢地区に同じである。用意する精進料理は概ね金沢地区の事例と大差はないようであるが、細かい差異としては変わりご飯を用意する永澤家の例に対し、菅原家では赤飯を用意することだった。アチ子氏の話によれば、家例により供する精進料理の内容は様々であるが、赤飯を供するのが正式であるのではないかとのことだった。また、供物を供する際に皿として使用するハスの葉は、裏面を使用するのが本来の様式とのことで、具体的な理由は定かではないようだが、一説によれば、表面部分は仏が足

を乗せる面であり、同じ面を使用する不敬を避けるためではないかとのことである。その他、菅原家では期間中15日に供物の一つである土産餅（資料10参照）を屋敷の庭にて搗き盆棚に供えるという。なお、飯倉地区ではこの土産餅は、祖靈が翌16日の朝に食して帰って行くという文化認識があるようだった。

実際の盆行事の大まかな流れとしては、菅原家でも入り盆となる8月13日に盆棚を用意し、夕刻には門口で迎え火を焚く。その際、焚き付けに使用するのはやはり麦わらであるという。同行頂いた阿部氏の話では、焚き付けに麦わらを用いるのは麦収の時期が丁度7月に当たり、それが旧暦の盆の時期に重なることから、身近な素材として利用しやすかったのではないかとのことだった。なお、稻作地帯であるにも関わらず稻わらを使用しない理由については、麦と違い稻の収穫が8月末から9月に掛けてであるため、盆に使用するには前年に収穫された古いものを使用せざるを得ないことから、使用が避けられたのではないかとのことだった。

その他、供物の供し方として、期間中ハスの皿に随時料理が増えていく永澤家の事例とは異なり、菅原家ではその日ごとに供した料理を下げるのだという。下げる料理はハスの葉にくるんで取り置き、16日の送り盆の際にキュウリの馬や茄子の牛、その他の盆棚飾りなどと共に川へ流すのが慣例であるという。しかしながら菅原家でもまた、現在では環境保護の観点から、供物や飾りは川へは流さず燃やすか捨てるという処置を取っているそうである。

#### ④金沢八幡神社宮司・金沢家の事例

金沢家は代々、金沢八幡神社の宮司を務めている屋である。屋号を「三居山」といい、これは金沢八幡神社が以前内沢地区の三居山に所在したことに由来している。聞き取りは主に現在の神主である金沢直氏、先代神主の純一氏（98）にお答え頂いた。なお、純一氏は明治45年当地の生まれである。以下に調査結果を紹介する。

金沢家の先祖は山形県の出羽三山の一つ羽黒山にて修験の修業を積み、その後内沢の笠縫部落（カサネ／カサヌイ）に戻り、神仏習合の形で三居山にあった金沢八幡神社の宮司を務めるのと同時に修験道場を開いた。道場では修験道に基づく敬神崇祖の精神指導を行う傍ら、寺子屋を併設し算術なども教えていたとのことで、内沢から現在の金沢の地に遷宮した後も、それらは大正時代の初め頃まで続けられていたという。また、近隣には金沢八幡神社の他にも飯倉八幡神社・清水八幡神社などがあるが、いずれも神主を務めているのは元修験者の家系とのことで、やはり金沢家の例に同じく羽黒山での修業を経て、その後各地に戻り修験道場を営むのに合わせ宮司を務め始めたとのことである。これは往時、山形から気仙沼に至るまでの範囲が羽黒山の信仰圏内であったことがその理由であり、したがって当地方の修験者たちは皆羽黒山での修業経験を持つ者であるという。

神仏習合の名残から神社でも盆の時期には盆棚を作る。金沢家でも入り盆となる8月13日から送り盆となる16日までは盆棚を据える（資料11参照）。ただし、神式に付き、設置する盆棚は当地に一般的に見られる棚とは違い二段式で段の幅が広めな棚を用い、設置場所も神棚の前に作る。その際、棚にゴザやガツゴは敷かず白い布を掛ける。また、盆棚飾りも色紙飾りや五色幡等の仏教的な要素は一切入れず、棚全面の両脇に立てる笹竹も周辺民家の例と

は異なり少し太めの笹竹を使う。また竹の間には注連縄を張り、そこに紙垂を取り付ける。その他には、棚の両脇に神社の紋が入った白の盆提灯を下げるのが習わしであるという。

盆棚に上げる供物についても、神式に基づき精進料理等は供さない。用意する食器類（資料12参照）もハスの葉や柳箸ではなく、三方（または折敷）に瓶子（酒を入れる瓶）、水器、平壺を乗せ、そこに白飯（生米）や塩を供する。その他には季節の野菜や果物、菓子なども供える。ただし、白飯は盆の時期だけ供えるものではなく毎日神棚に供え、盆の期間中のみ盆棚に供するという。

### 3. 各調査結果と『金沢郷誌』の年中行事表との比較

#### (1) 調査結果の比較

上記に金沢地区の永澤家、金沢公民館、飯倉地区の菅原家、そして金沢神社神主の金沢家での聞き取り調査の結果を記した。以下に、その相違点をまとめる。

はじめに、地域に一般的に見られる盆行事と神式を執る金沢家の盆行事との差異についてふれる。先に述べた通り、神仏習合の名残から、神主職にある金沢家でも盆期間中に盆棚を飾る。しかしながら、その様相は同金沢地区の家々とは大きく異なっており、特にその差異が顕著に見られるのは棚の様式や飾り、また供物などである。金沢家の聞き取りによれば、色紙飾りや精進料理は仏式に基づくもので、故に神式では用いないとのことであったが、これは明治政府により打ち出された数々の神仏分離政策の影響で神社から仏教色が一掃されたその結果であると思われる。それにより、金沢地区のこの色紙飾りや精進料理は、仏式あるいは民俗信仰に基づくものであることが合わせて推測された。

次に、金沢地区、老松地区、飯倉地区における事例を比較する。これらの地区には、今回の調査結果をみる限り、それほど大きな差異はないものと思われる。細かな点としては、供物の供し方に関し、実際に聞き取りを行った永澤家と菅原家とでは、前者が一度供した精進料理を盆の期間中が終わるまで棚にずっと上げておくのに対し、後者は新しい料理を上げる度に古い料理を棚から下げるなどの差異がみられた。また、精進料理の献立の一つとして、永澤家では変わりご飯を用意するが、菅原家では赤飯を用意するのも相違点といえる。なお、老松地区の事例では、変わりご飯や赤飯ではなく、おふかしを用意することから、これも他の二地区とは異なる様相を呈している。しかしながら、こと精進料理に関しては、その家独自の慣例も多く、現時点では上記の差異がそのまま地域差を表しているとは断定出来ない。

その他、高灯籠に関しては、老松地区では「新盆のある家」という条件でもって設置がなされているようであるが、菅原アチ子氏に対する聞き取りから、今回は調査対象外であった油島地区において、それは新盆のあるなしに関わらず毎年設置するものであるらしいことが分かった。おそらくこのような細かな地域的差異は、その他の周辺地区においても同様にみられるのではないかと推測される。なお、金沢地区においては、現在高灯籠を設置する家の例はないようであるが、公民館での聞き取りによれば、以前は老松の事例に同じく金沢でも新盆のある家で設置していたとのことだった。

## (2) 『金沢郷誌』との比較

上記の結果をふまえ、次に金沢郷誌にある盆行事に関する記載と比較・検討を行う（表1参照）。なお、この金沢郷誌に記載された事例は、初版刊行時である昭和30年代の金沢における事例であり、昭和30年代といえば、丁度金沢村が周辺の村々と合併し花泉町となった時期に重なるものである。

まず、13日の盆市から検討していく。この日は永澤家の事例にも見られた通り、盆に入用な品々を買い出しに行く他、盆棚の設置などを行う。しかしながら、郷誌の記載によれば、供物に regard し若干の差異が見られるようで、それによると、この日は団子を作り盆棚に上げる他、昆布や秋の七草なども同時に棚に供するとのことである。

続いて14日には、永澤家における事例に同じく、家人揃っての墓参りとある。また、用意する食物については、朝に赤飯とあり、これは菅原アチ子氏の聞き取りと一致するものであった。しかしながら、筆者自身が墓参りの際に各墓地に供された供物を観察したところ、永澤家同様に変わりご飯を用意する家がいくつもあるようで、やはりこれも家例による違いなのではないかと思われる。

翌15日は特に新盆と称され、初盆のある家における行事が詳細に記されている。また、老松地区の事例に同じく、初盆のある家において高灯籠を吊すとの記載がみられることから、昭和30年代までは金沢地区でも確実に高灯籠が設置されていたことが窺えた。なお、金沢地区では初盆のある家という条件の他にも、高灯籠は農家で行うという記載が見られることから、条件は更に限定的であったのかも知れない。また、その他の記載によれば、この日既に送り盆をしてしまうようで、この点は今回の調査結果のいずれとも当てはまらないものであった。しかしながら、送り盆に合わせキュウリの馬が作られるという記載については、公民館で聞き取りを行った際の「一方通行の乗り物」という文化認識を裏付けるものであると思われる。

## 4.まとめと結論—結びにかえて—

比較・検討の結果、金沢地区における盆行事には、その行事内容に関し周辺地区との多くの類似点がみられた。これはつまり、この伝統は当地区のみに伝わるものではなく、藩政時代の行政区分であった旧流地区の範囲に広がる共通した文化である可能性が示唆されるものである。また、金沢地区で現在行われている盆行事も、供物の種類や新盆における行事の一部省略、送り盆に対する認識の違いなどがみられるものの、全体的には郷誌に記載された行事内容をよく留めおり、文化継承の好例であることが分かった。

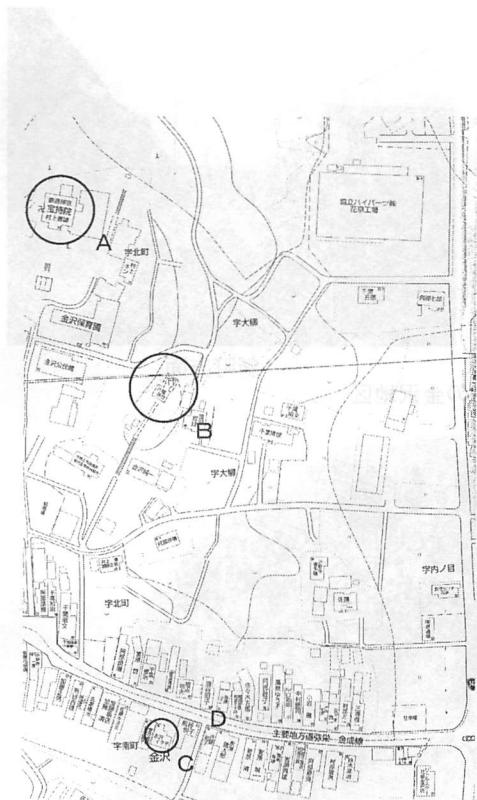
残念ながら今回の調査では、時間的制約により、調査対象も金沢地区、老松地区、飯倉地区の三地区に限定され、また、聞き取り調査の実施もごく僅かな数に留まったことから、上記に示したような可能性を実証するには至らなかった。したがって、今後は引き続き金沢地区、老松地区、飯倉地区での聞き取りを続けると共に、その他の地区においても文献精査を行い、それに基づき合わせて聞き取り件数を増やすことが急務であると思われる。それにより、金沢地区をはじめとする旧流地区の盆行事の様相を明らかにしていくことを課題とし、結びに代えたい。

## 謝辞

今回の調査では、金沢公民館館長・小岩達氏より格別のご配慮を賜りました。永澤洋氏をはじめとする永澤家の皆様には、益期間中の当家への滞在を許され、様々なご教示を頂きました。また、急な申し出にも関わらず、快く聞き取りを引き受け下さった菅原アチ子氏をはじめとする菅原家の皆様、金沢純一氏・直氏をはじめとする金沢家の皆様、調査にご同行下さり様々なご助力を頂いた阿部氏、資料収集等にご助力頂いた石森治氏、石森美代子氏、それら全ての方々に心よりの感謝の意を申し上げます。

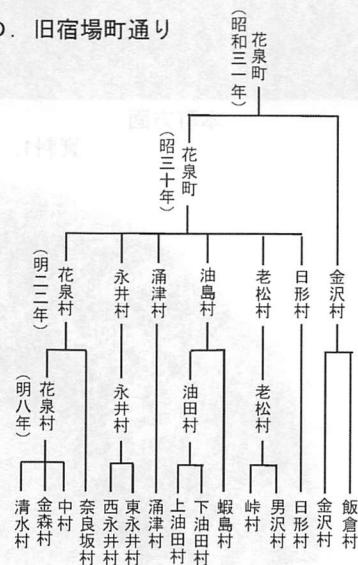
## <主な参考文献>

- 佐藤教昭 2009年『くらしに生きる祖先の心を訪ねて』,pp.15-16,御嶽山御嶽神明社  
金沢村教育委員会 1999年『金沢郷史』,pp.25-36,175-187,207,235-239,305-30,197-205,金沢区先人顕彰会・金沢公民館  
花泉町史刊行会 1984年『花泉町史（通史）』,pp.314-347,花泉町史編纂委員会  
岩手県神社庁 2010年『郷土暦』,pp.52-57,岩手県神社庁  
金沢公民館 2010年『気仙沼街道と金沢宿』,金沢公民（配布資料）  
一関市博物館 2010年『磐井郡周辺の村々』,一関市博物館（2010年特別展示配布資料）



地図1. 花泉町金沢地区

- A. 宝持院
- B. 金沢八幡神社
- C. 永澤家
- D. 旧宿場町通り



合併系図（地図2. 補足資料）



地図2. 市長損合併前の一関周辺地図（一関市博物館配布資料を一部加筆）



本町方面

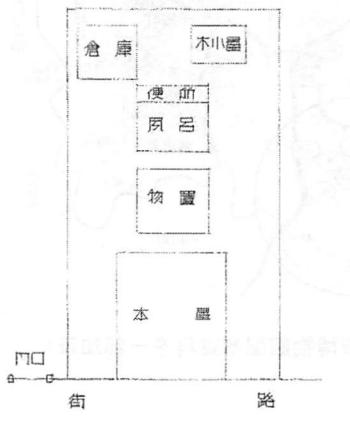
新町方面

資料1. 現在の金沢地区

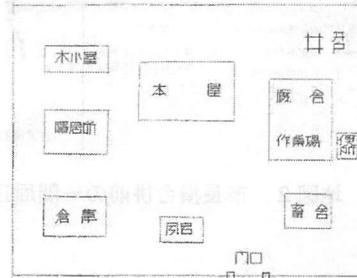


資料2. 大名行列

商家の場合



農家の場合



資料3. 商家・農家屋敷配置図 (『金沢郷誌』1999,p.207より)

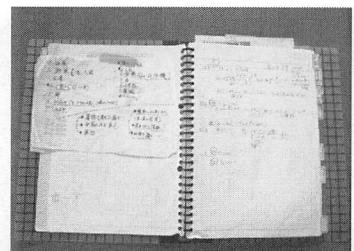
「岩手県一関市花泉町金沢における盂蘭盆会の風習」



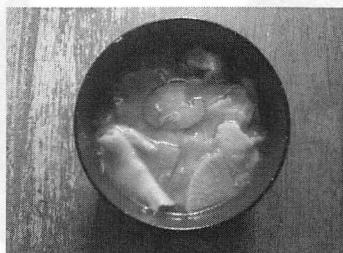
資料4-i. 盆棚完成図



資料4-j. 迎え火



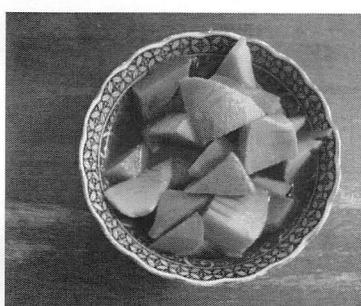
資料4-k. 幾子氏メモ



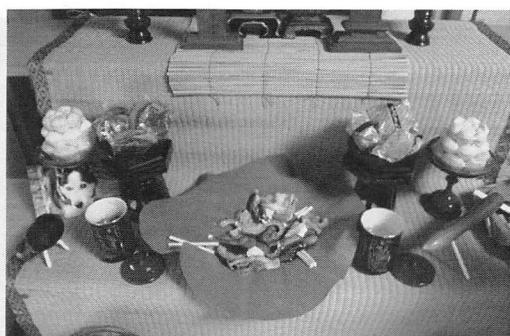
資料4-l. ハット



資料4-m. ハヤキ

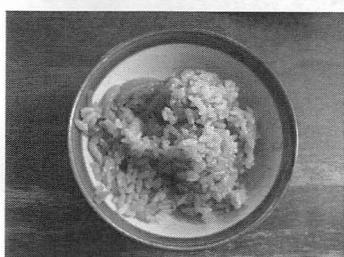


資料4-n. 煮しめ

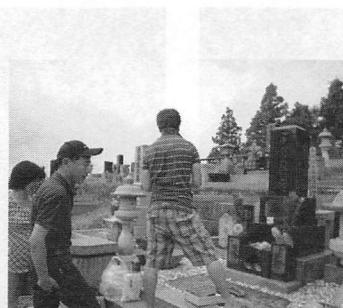


資料4-l. ハス皿と供物

[八月一四日]



資料4-p. 変わりご飯



資料4-q. 墓参り

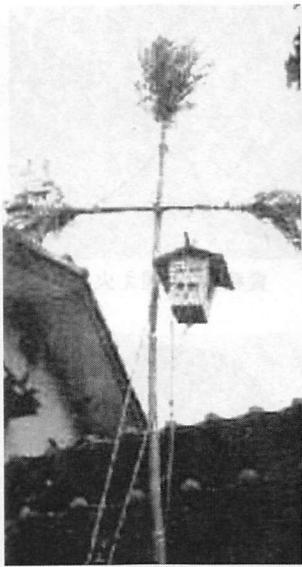


資料4-r. ハス皿

資料4. 永澤家の盆行事



資料5. 永澤家1993年の盆棚



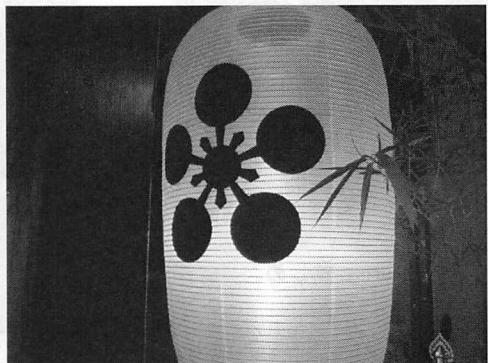
資料6. 杉灯籠



資料7-a. 菅原家の古式盆棚



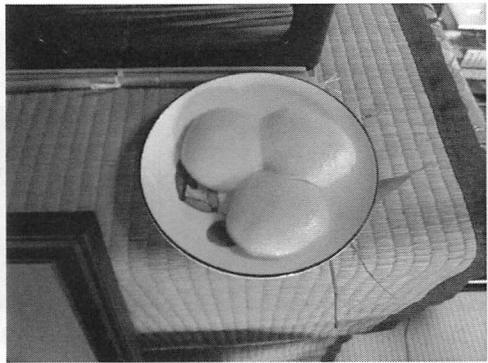
資料7-b. 古式本棚



資料7-b. 古式本棚

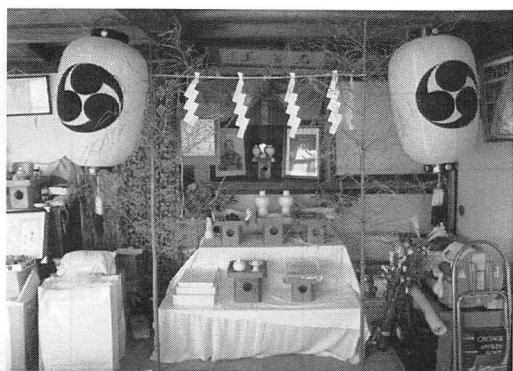


資料9. 朱塗り膳とプラスチック製皿



資料10. 土産餅

「岩手県一関市花泉町金沢における盂蘭盆会の風習」



資料11. 金沢家神式盆棚



資料12. 食器類と供物

一六日	一五日	一四日	七月十三日	
	新盆	墓参り	盆市 (ほんまち)	名称
	初盆のある家では、親類、緑者を呼び、仏を拝んでもらう。高灯籠(杉灯籠)を吊す。初盆の家の招かれた者は、夕方に墓へ「あかしたて」に行く。送り盆をする。盆飾りを外し、川に納める。キヨウリで馬を作り、足には柳橋を用いる。取り外した飾りは昆布で縛り、川に捨てる。	朝は赤飯、夜はきり麦、または、うどん。精進料理も作り、仏前に供える。	朝は赤飯、夜はきり麦、または、うどん。精進料理も作り、仏前に供える。	盆中に人用なものを賣い入れる。 盆棚を飾る。
白飯、お精進料理を作り、留守仏に供える。	餅を揚いて、仏に供える。	高灯籠は農家でやる。高い棒に三本の綱を付け、それを三方に張り、綱には杉の葉等を差す。棒の先に灯籠を付ける。送り盆は、墓道の方に「ラッショグ」をさし、仏を送る。ラッショグとは、麻がらを二十五種くらいに切り、先端に松やにを付けたもの。	墓参りには線香を焚き、団子や茶を供えるのは勿論のこと、ハスの葉の上に益米を供える。益米とは、米にナス、キュウリを刻んで混ぜたもの。	団子を作つて盆棚に供える。 花提灯を飾る。
		高灯籠は農家でやる。高い棒に三本の綱を付け、それを三方に張り、綱には杉の葉等を差す。棒の先に灯籠を付ける。送り盆は、墓道の方に「ラッショグ」をさし、仏を送る。ラッショグとは、麻がらを二十五種くらいに切り、先端に松やにを付けたもの。	往時は、花束、清水まで行って買い物をし、仏を迎えてきたという。その他、「昆布」を少々、秋の七草、五色紙、花提灯を飾る。	備考

表 1.

『金沢郷誌』2009年、pp. 236-239 より作成